

中国

電気鉛輸入が収束

中間原料は調達拡大

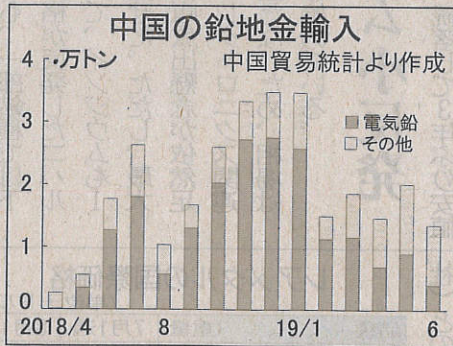
中国の電気鉛輸入が収束してきた。同国の貿易統計によると、電気鉛に相当する精製鉛の6月輸入量は3967トで、ピーク時の約7分の1まで減少。環境規制で強いられた自国減産分を輸入でカバーしていたが、生産復旧に伴って調達を絞ってきた。一方で中間原料の輸入を増やす傾向もあり、日本の鉛リサイクル業への影響が考えられそうだ。

日本鉛リサイクル業に商機

中国は年産500万ト近い世界最大の鉛生産国。リーマン・ショック後の地金輸出入は自国生産規模の1%前後の年数万トにとどま

り、リサイクルや買鉱製錬を含め、ほぼ自給自足バランスを保っていた。しかし昨年、政府主導の環境規制強化

によって一次製錬・二次精錬メーカーの生産が抑制されたため、国内需給が引き締まり、6月頃から電気鉛の大口スポット輸入を行っていた。



電気鉛、合金などを含み地金の輸入量は昨年11月から今年1月に季パターリー需要期が過ぎた2月以降は半減し、6月輸入は地金総

量で1万3585トまで下がっている。品位別の内訳を見ると、電気鉛相当の精製鉛は昨年12月の2万7522トをピークに、4月以降は1万ト未満に減少。6月は輸入が本格化した昨夏以前の低水準となった。カザフスタン、豪州、インドからの輸入はほぼ途絶えており、韓国からの調達を残すのみとなっている。市場関係者は「6月に起きた豪州製錬所の出荷ストップとちょうど入れ替わり形になったので、急に供給余剰になることはないだろう」と見ている。

一方、中間原料の粗鉛(フリオン)をさす合金その他の中国輸入量は、ここに来て増えている。5月は1万1333ト、6月は9618トの月1万トペースとなり、それ以前の1年間の月平均と比べると倍増。マレーシア、ベトナム、フィリピンなどの東南アジア諸国やアフリカからも輸入し、精製用の中間原料調達に注力している向きがある。

粗鉛は国際的にも汎用性のある中間原料。日本国内でも昨年の廃バッテリー(使用済み自動車用鉛蓄電池)の輸出ストップを機に、二次精錬メーカーで増産が活発化し、すでに輸出も行われている。中国の調達拡大もあって、粗鉛価格(電気鉛に対する掛け率)は海外で90%半ばで高止まりしており、国内の鉛リサイクル業界にとっての中国情勢は、商機となる可能性もありそうだ。